

# 被害額年間 193億円！ 書店万引きの 実態とその対策



## 被害額年間 193 億円！書店万引きの事態とその対策

本に IC タグ（電波によって情報を記録させる小さなチップ）を装着しようという取り組みが六年ほど前より活発化され、ようやく実験段階に入ってきたようである。

この取り組みの目的は、一冊一冊の本の流れを明確に把握し、客注への適切な対応にあるが、その実、最大の目的は万引き防止にある。

本の万引きと言えば、ひと昔前までは、「本を読みたいため」「本屋への嫌がらせ」などであったが、今日では「換金目的」が一番の理由になっている。すなわち、ブックオフのような新古書店にて現金と引き替えることを目的に万引きをするのである。

その万引きの現状報告と、その対策として今最も注目されている業界の取り組み「IC タグ」の報告会が、暑い盛りのおおさかのとある会議室で行われた。これはその報告会で公表された数値を基にした、書店万引きと IC タグの現状である。

### 出版業界と書店の現状

まず、数字で出版不況を認識しておきたい。

2007 年度の一年間の本の総販売額は 2 兆 8 5 6 億円で、2001 年に比べて▲2397 億円（▲10%）と市場が狭くなっている。

全国の書店数は、2007 年の調査時点で 17098 店となっているが、これも 2001 年と比較すると▲3841 店（▲22%）と激減している。

出版業界は完全に斜陽産業である。

そして、本の売上げが減っている中で、万引き増加は書店経営をさらに圧迫する重要な要因となっている。

### 書店におけるロス額

万引きの実態を数字で見たい。

ロス額とは、理論在庫（入荷から売上と返品を差し引いたあるべき書店の在庫額）－ 棚卸し額、である。

全国の書店 14 社 643 店舗の回答をもとに、次の報告がなされた。

調査店舗の総売上額 2909 億円、ロス額 55 億 6 千万円、平均総ロス率 1.91%（ロス率とは売上高に占めるロス額の割合）。

これを全国の総書店数に換算し、年間に日本の書店でどれだけの総ロス額があるのかを計算したところ、261 億 7 千万円という数字がはじき出された。

さらに、このロス額の内、26.36% は伝表ミスや返品不能等の理由であり、あとの 73.64% は万引きであるという報告がなされた。額にして 192 億 7 千万円が年間の万引きによる被害額である！

なんと、一日に日本の書店で、5279 万円が万引きされていることになる！

売り場面積とロス率の調査結果も報告されたが、面積とロス率には相関関係がない結果が出た。すなわち、大きい書店であろうが小さい書店であろうがロス率は変わらないという結果が出た

。大きい書店も小さい書店も、万引き犯に狙われているのである。

## 万引きの内訳

万引きの対象となるジャンルは、圧倒的に「コミック」である。

万引き被害のジャンル別統計において、まず冊数ベースで見ると67.8%がコミックである。万引きの三分の二はコミックということになる。なお、コミックは単価が低いので、金額ベースで見ると40.7%となる。

続いて多いのは、「写真集&高額本」で、冊数ベースで15.3%、金額ベースは33.0%となり、ほぼ万引きは、この「コミック」と「写真集&高額本」に集中していることが分かる。

(よって、ICタグの装着実験はコミックから始まった！)

## 万引き現行犯の目的

現行犯で捕まった万引き犯の、罪を犯した目的の報告もあった。

アンケートを行った291店舗で捕まった2892件の万引き現行犯の目的は、「換金目的」34.3%、「読みたかったから」44.9%、「スリルを楽しむため」2.4%、「その他」18.4%であった。

なお、警察での追求で「読みたかったから」の81%が「換金目的」であったとの報告も載せられていた。最終的に万引き犯の70.62%が「換金目的」と推計できる、と結論されていた。

## 書店の万引き防止の取り組み

ところで、現在書店においてどのような防犯対策がなされ、それに対してどのくらいの費用が必要なのかを見てみよう。全国の11社625店舗のアンケート結果である。

まず、万引き対策として挙げられるのが「防犯カメラ」である。これは初期投資に約4億3千万円の費用が掛かり、さらに年間の運用費は1億円以上掛かるというデータが公表された。「防犯ゲート」を設置しているところもあり、これには初期投資に1億5千万円が掛かり、年間の運用費にいたっては4億5千万円も掛かっている。

一方、もう一つの防犯対策が「ガードマン・監視員の配置」である。これは初期投資は掛からないが、年間の運用費は4億9千万円も掛かっている。

これだけの費用を、調査した625店舗の書店だけで、万引き防止のために投資しているのである。これらは書店の売上げから捻出される費用で、決して少なくない数字である。(書店は、はたして利益が残っているのか?)

## 書店のみが被害者

さらに、業界の衝撃の事実を報告しよう!

実は、この万引きの被害は、出版業界において、被害を被っているのは、書店だけなのである。つまり、出版社も、書店へ本を卸している取次も、書店が万引きの被害に遭っているにもかか

ならず、その万引きの被害額は考慮されず、納品した本の金額をそのままに書店に請求しているのである！

(確かに、書店だけを被害者にしてはならない。出版社も、取次も、今後この対策への協力を惜しんではならないと思う)

## ＩＣタグの登場

このような出版業界に数年前に登場し、その一日も早い実施が望まれているのがＩＣタグの装着である。

先にも言ったがＩＣタグとは、電波によって情報を記録させる小さなチップで、その本が出版社を出荷してから読者の手に渡るまでの行程が記録されるのである。

よって、万一、書店のレジを通った記録がない本が新古書店に持ち込まれた場合、換金できないという規則を業界で構築すれば換金目的の万引きが防止できるというわけである。

また、このＩＣタグを装着するのは出版社の役割で、その作業に伴う費用は出版社が負担することになる。ここで、ようやく出版社も書店の万引き防止への役割を担うことができるというわけだ。

多くの出版社がこの動きに協力の意思表示をしているが、問題はそのＩＣタグの一枚単価がまだまだ実用の範囲にならないということだ。かつては一枚が数百円から場合によっては千円以上もしていた。将来は一枚５円を業界では目指しているが、この道のりに時間が掛かっている。単価を下げるためには、技術的な開発と、多くのＩＣタグが生産されなければならない、業界的には出版冊数の多いコミックがまず最初の装着目標とされている。

## ＩＣタグの未来

今や、消費者中心の時代にあって、本の流通の形態は過去の遺物を見ているようである。

注文してから本が書店に届くまでに１０日から２週間も掛かる、いや１ヶ月掛かることすらある。かつ、それが何日の何時に入荷されるのか、書店員はまともに答えることができない。情報化された今日、注文した物が今どこを歩いているのかという情報が、注文した人の携帯電話に逐一連絡が入る時代に来ているというのに……。

この本の流通革命の救世主となるのが、ＩＣタグである。このタグを装着することにより、一冊一冊の本の動きがデータとして管理され、出版社・取次・書店の三者における在庫状況、出入荷の管理、さらには売れ行き良好書の把握まで簡単にできるようになる。

また、それだけではない。本は今、裏表紙に表示されているバーコードを一冊一冊読み取って管理しようと努力されている。これがＩＣタグを装着することで、段ボール箱に向かって読み取り機（リーダー、ライターと呼ばれるもの）をかざすだけで、その中に何の本が何冊入っているかが一瞬にして読み取れるようになるのである。人的ミスも少なく、取次や書店の煩雑な作業を一気に削減してしまう優れものなのである。

このＩＣタグの装着により、本の流通システムは大きく変革するであろう。早く一枚５円のタグが開発されるのを心待ちにしたい。

## 報告会の感想

最後に、報告会に参加したことの個人的な感想を述べて終わりたい。

このICタグの報告会が行われたのは、大阪市内にある取次の大阪屋本社会議室であった。

東京ではこれまでも何度か開催され、業界の大きな問題でもあり、たくさんの参加者で盛り上がっていることを業界紙などで知っていた。

出版は東京一極集中のため、このような報告会もわざわざ東京まで出張しなくてはならないことにストレスを感じていたところ、初めて大阪でも開催されることを知った。（なお、自慢ではないが実は3年前に、私ども関西自費出版の会では、この内容のセミナーを独自でお願いし、凸版印刷大阪支社の会議室で行った実績があった）。

今回の大阪での報告会は、2008年8月1日金曜日の午後3時からという、書店や取次や出版社にとっては忙しい業務時間帯でのセミナーとなり、どれだけ的人数が集まるのか注目していたが、やはり業界の関心事とあって次々と会場に人が集まった。用意していた資料が足りなくなったことを、遅く来た参加者に司会者が詫びていた。

開会前から、会場は熱気むんむんとなった。やはり、このICタグの未来には業界が期待を寄せていることを実感した。

出版業界は繰り返すが斜陽産業であり、そのことをいきなり強く印象づけたのが、日本書店商業組合連合会副会長・近畿ブロック会長の面屋龍延氏の開会の辞であった。

「日本の出版業界の危機的状況に何を言ってもむなしく、過去の栄光の時代には二度と戻らない。作家の五木寛之先生も『（出版業界は）いまは鬱の時代である。躁の時代が50年掛かって終わり、バブルの時代があって、いま鬱の時代が来て、これがこれから50年続く』と言われました。ただ、『鬱は鬱蒼と茂ると言う言葉があって、エネルギーがたくさん貯まっていく時代でもある』とも言われました。私どもはそのことを強く認識して、これからの時代をがまん強く乗り切っていかなければならないと思います」

業界にとって鬱の原因は、一つは本が売れなくなったこと、もう一つが万引きが増えていること、この二つである。

ICタグは、この万引きをどう防ぐのかということから始まった取り組みである。付加価値も多いICタグが、一日でも早く導入されることを期待したい。

※当日の報告会の正式名称は「日本出版インフラセンター（JPO）活動報告会」である。ICタグ研究委員会各部会報告として、書店部会、装着・古紙化部会、出版社・取次倉庫部会、図書館部会の四部会からの報告がなされたが、この記事は主に書店部会からの報告を基にした。また、部会の他に「出版RFIDコード管理研究委員会の取組について」「日本出版インフラセンターの活動全般について」の報告もなされた。

※データは報告会当日に使われたJPO日本出版インフラセンターの資料であり、同資料は同組織のホームページで閲覧でき、引用して利用することが可能である。

（文・写真：星湖舎代表・金井）